

## 山に親しみ山に想う

### —小さな探検・掃除屋糞虫— (22)

〈文・絵〉 岡本

探検の意味は、未知の地域を実地に探り調べること、危険を冒して調査すること、と辞書にある。最も通俗的には最高峰エベレスト登頂や極点到達などがこれまで探検と言われてきたが、同じ意味での探検に匹敵するところがほぼ達成され尽くした。代わって宇宙開発がらみの宇宙探検とか医学研究がらみの生命の探検とかの使われ方が幅を利かすようになってきた。

大逆転の探検の用法として、日常の探検は成り立たないだろうか。子供の頃、薄暗い樹林の中を探りに行くこと、これも探検と称して武者振るいしたものだ。しかし、大人になると新しい発見や体験も、あれこれと理屈をつけたり、智につき過ぎて探検の驚きを感じるものがなくなってしまう。日常の瑣末なことでも、自分にとって驚きを伴う未知の発見や体験であれば、それは探検行為と言えるのではないだろうか。

低山歩きは、日常を探検に変えるのに恰好の行為ではないか。先ず、山に入ると、子供心に回帰して、横溢する好奇心を抑えることができなくなり、瑣末な事象の中に「発見」を見つけることになる。これはもう探検である。これまで低山歩きを通じての日常を探検に変えた小さな発見、体験を紹介する。

「誰もめったに踏み込まないような場所で自分を苛める斬新な方法を見つけた人よりも、一本の野草がこの宇宙でどんな役割を果たしていて、私たちの思考や感情にいかなる作用を及ぼしているかを理解するすべを教えてくれることのほうが、人類に資するところは大きい。」

(ドリスタン・グーリー著「日常を探検に変える—ナチュラルエクスプローラーのすすめ」紀伊国屋書店)

2009年10月11日、家内と二人で白丸駅から鳩ノ巣駅まで多摩川の溪流沿いを歩き、うまいものでも食べようかということで出かけた。白丸駅で下車した際、改めて地図を見て数馬の切通しの存在を知った。小学生低学年の頃、夏休みに母の生家に行った際、9才年長の従兄弟が漕ぐ自転車の後ろに乗り、真っ暗な切通しを通過して隣の集落まで行ったことがある。何故月明かりのない夜中に行くことになったのか憶えていないが、その時の闇の深さと切通しの竹林が発する異様な葉音が怖かった。家内とそんな怖い体験話をした末に、「だから、切通しをチョット見てみよう。」ということになり、数馬の切通しに立ち寄った。

数馬の切通しは白丸駅から奥多摩駅方向へ600mほど進んだところにある。尾根越えの高みを通っていた昔の青梅街道は、元禄期に大岩を人力で開削した切通しにより奥地との物流交通が促進された。青梅街道の要所だったのだ。



数馬の切通しの手前で未知との遭遇が起こった。地表にキラッと輝くいくつかの点が眼に入った。何だろうと眼を凝らすと、2cmほどのブンブン(関西ではカブトムシ、クワガタ以外の甲虫はブンブンと言っていた)である。穴の周りに4匹おり、中にも更に何匹かいるようである。4匹も穴の周りにいるのを不思議に思い、写真を撮った(見えづらいが4匹いる。写真①)。その時は甲虫の中にいわゆる糞虫がいることを知らなかった。



2017年6月10日、陣馬山の北方向にある要倉山(標高562m)を歩いた際に、鹿か猪の獣糞の中にいたブンブンを見つけ写真を撮ったのを機会に、それが糞虫のセンチコガネ(雪隠黄金虫)であることを知った(写真②)。子供の頃、その季節になればブンブンを捕って遊んでいたが、虫を観察したり標本を作る昆虫少年ではなかったので、糞虫の存在を知らなかった。数馬の切通しで見たブンブンは要倉山のセンチコガネと同類であった。

センチコガネを昆虫事典などで調べると、「背面は金属色で光沢をもつものが多い。獣糞に來集する。通常糞の下または付近の地面に穴を掘って潜んでいるが、糞塊を転がしているのを観察した報告もある。幼虫はジムシといって、土の中や積み肥、獣糞などに棲む。糞の下に潜り込んだ成虫は垂直に穴を掘り(5cm~30cmの深さまで)、糞だんごを穴に入れて糞だんごに産卵する。出現期は4月~11月である。」。

今思えば、2009年6月以前に糞虫に遭遇していた。2004年頃、濟州道勤務中に漢拏山や寄生火山(オルム)を歩き回っていた。濟州道には牛馬の牧場が多く、牧場を横断したある時、変わったカブトムシを見つけたと思った。大きさは3cmほどで背面はカブトムシのオスと同じ色艶をし、同じく頭部に湾曲した刀のような長角を具え、更に胸部にも小さな角があるが、カブトムシのように1本ではなくv字形で2本である。角のないメスも捕って持ち帰り、写真を撮り細密画を描いた(写真③)。この時、子供が初めてカブトムシを捕った時のような興奮に浸った。名前を調べてもらうため細密画をファックスで留守宅に送ったが、返事がなかった。要倉山の糞虫を調べる中で、ダイコクコガネ(大黒黄金、コガネムシ科)であることが判った。ダイコクコガネは牧場などの獣糞に集まって深い縦穴を地中に掘るといふ。日本では牛馬(牧場)が少なくなったことから糞が安定供給されなくなって、環境省のレッドデータブックでは2007年以降絶滅危惧Ⅱ類に指定されているという。



糞虫は糞を地中に運び入れ地中で発酵させてから糞球(育児球)を作り、糞球に産卵する。孵化した幼虫は糞球を食べて成長する。近年、餌に含まれる抗生物質が発酵を邪魔して良い糞球が作れない例がみられるという。

かつては、都会でも糞虫がいた。糞尿汲取りに使われた牛車の牛や野犬などの糞が道路のあちこちにあった。汲取りは水洗トイレに変わり、野犬はいなくなり、ペット犬の糞は飼い主が持ち帰ってしまう。時代の流れとはいえ、糞虫は都会に棲めなくなった。

糞虫を知ったことから、ファーブル昆虫記の該当部分を読んでみた。ファーブルは糞虫が古代エジプトで太陽神の象徴と考えられていたことや、糞虫の生態を巧みに描写している。例えば孵化した幼虫を「つやつやと健康的で、象牙のように白く、スレートのような青みを帯びた、一点の汚れもないでっぴりした幼虫に姿を変えるのだ。」と、卵かけ御飯ならぬ、幼虫かけ御飯にして食べたくなるほどに魅惑的な表現をしている。古代ローマ人はコッススと呼ばれる幼虫を「風味絶佳」と評して美食としていたという。

(了)